魔法少女リリカルなのは～転生せし者～

橘　葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～転生せし者～

【Ｎコード】
Ｎ７２３６Ｏ

【作者名】
橘　葵

【あらすじ】
ごくごく普通のオタクな大学生である主人公は大学に行く途中でトラックに轢かれ死んでしまう。気がつくと一面真っ白なところにいた。そこで死神と名乗る男に土下座され、並行世界【魔法少女リリカルなのは】の世界にチート性能で転生することに…。彼は２度目の人生を無事に過ごせるのか！？
※この小説はオリ主・原作崩壊・原作介入等が含まれます。『原作を壊したくない』『原作を汚したくない』等思われている方は読むのをやめることをお勧めします。またデバイスの言葉は基本的に日

本語です。

prologue1（前書き）

初投稿

もんもんとしてやった。後悔も反省もしている。

prologue1

≪ピピピッピピピッピピピッ≫

「ぬな…もう朝か…なぜパソコンをいじっていると、こんなにも時が経つのが早いのだろうか？」

俺の名前は望月葵＜もちづきあおい＞

しがない大学生をしている

ちなみに大学は地元ではなく県外に出ているため、悠々自適なひとり暮らしをしている

今日も昨日の夜から久々に【魔法少女リリカルなのは】を無印からＳＴＳまで見ていた

俺はいわゆるオタクだ

高校まではそこまでひどくなかったのだが、大学に入り友人の影響を受け完璧なオタクと化した

「ふぁ～あ……背中がバッキバキ言ってるのだ…。さっさとシャワー浴びて大学行って寝よ…。とりあえず出席だけしとけば何とかなるし…。」

俺はシャワーを浴び、ルーズリーフと筆箱、財布、ＰＳＰと充電器だけ入ったカバンを持って大学へ向かうためにスクーターのカギを持ち家を出た

「さって今日は何を聞きながら行こうかな？やっぱり【深紅の〇旗】かな。」

スクーターに乗りながら、音楽を聴くのは違法なんだがそこはご愛敬ってことで…

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「赫い血の華、狂えと、心が消えてく～」

やはり神曲だな…

あとはここを曲がれば大学まですぐだ…

あれ…

なんで…

目の前に…

トラックがいるの？

キキッッー

ドン

グチャ

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

あれここはどこだ？

なんで俺はこんな一面真っ白なとこにいるんだ？

俺はトラックに轢かれたはず…

「うん轢かれたよ。それも見るも無惨な姿になってるね。」

「ッ、誰だお前。ここは何処だ。なぜ俺はこんなところに居る！！」

「うん、ひとつずつ順を追って説明するよ。でもその前に…」

「ごめんなさいっっ！！」

俺の目の前で土下座しやがった

「話が見えないんだけど…。」

「とりあえず説明するよ…。僕は死神と呼ばれる者だ。ここは…う～ん…なんていえばいいんだろう…。物凄く簡単に言うと、あの世とこの世の境目かな。なんで君がここに居るかだけど…」

「それは死んだからじゃねえの？」

「そうなんだけど、ほんとは君死ななかったんだよ。当初の予定で

は…。」

「はっ？」

「だからほんとは死んじゃいけないところで死んじゃったんだよ。」

「じゃあなんで俺は死んでんだよ…。おかしいだろ！！」

「イレギュラーが起こってしまってね…。１００年に１回あるかないかくらいの確率であるんだよ…。」

「じゃあ俺はどうなるんだよ！！あんた一応神様なんだろ！？生き返らせるとかできねえのか！？」

「すまない…。無理なんだ。僕は死を司る神だ。蘇生の力は持っていない…。第一君の肉体はすでにグチャグチャだ。戻ることはできない…。」

「そうか…じゃあ俺はあの世行きか？」

「いやそうじゃない。確かに僕は蘇生は出来ないが、転生は出来るんだ。同じ世界には転生出来ないが、並行世界で転生してもらうよ。」

Prologue1（後書き）

思った以上に長くなったので分けます。

誤字脱字等の指摘がありましたらよろしくお願いします。

Prologue2（前書き）

どうしよう
チート設定
悩ましい

橘心の一句

prologue2

「転生！？俺はまた生き返れるのか！？」

地獄から一転天国に来たみたいだ

「あくまで〔並行世界〕に〔転生〕って形だけどね。そういうことになるかな。」

「蘇生と転生って何が違うんだ？たいして変わらんと思うんだけど？」

死神は少し考える素振りをすると分かりやすく説明しだした

「蘇生というのは同じ世界に同一人物を亡くなった時の年齢でよみがえらせることだよ。ただこれは自然の摂理に反することになるから、世界がそれを矯正しようとするんだ。最終的にはその力に消される意味もあって蘇生は不可能な技術なんだ。」

「ふうん。なるほどね。じゃあ転生は？」

「転生は違う世界に同名でも違う人物として生まれることだ。」

「似たようで全然違うんだな。」

「そういうことだね。君には並行世界で誰かの子供として新しい生をうけてもらうよ。」

「そうそう、その並行世界ってのはどんなところなんだ。」

並行世界といえば簡単にいえばＩＦの世界だったと思うけど…

例えば俺が死ななかった世界…

そんな有り得たかもしれない世界…

「並行世界って言っても君のいる並行世界に行くわけにはいかない。だから君が絶対に居ないこの世界に近い世界。似ているようで、まったく違う世界。簡単に言ってしまえば漫画やアニメの世界にいってもらうよ。」

なん…だと…

みなぎってきました

あれでも…

「なあ、その並行世界ってどの漫画とかアニメか決まってんの？」

「ああ決まってるよ。【魔法少女リリカルなのは】の世界だよ。あと君には３つ好きな力をあげるからね。またこの世界での記憶は消

えないから、そのことも踏まえて必要な力を考えてね。」

ふむ

やっぱりあの3つかな…

「決まったぞ。」

「えらく早いね。聞こうか。君が望む1つ目の能力は？」

「俺が知識の中にあるアニメ・漫画・ゲームなどの魔法及び能力の使用かな。」

「なるほど～チートだねぇ。1つ目大丈夫だよ。承認。2つ目は？」

「身体能力及び潜在魔力の増大かな。出来るなら最低オーバーSは欲しいな。」

「2つ目承認。ちなみにEXランクにしといたからね。じゃあ最後の3つ目は？」

なんかますますチートだな…

とりあえず3つ目もお願いするか…

「知識が欲しい。ハガレンの真理やなのはのアルハザード以上のが

欲しいな。デバイスは自作しようと考えてるし…。」

「3つ目承認。たださすがにアルハザードや真理は無理だったけど、現在で最も知識があるぐらいにはなったよ。」

「ああ全然構わない。さてこれでやることは終わったか？」

「うん、もうないよ。後は僕の仕事だから。じゃあ今から君を並行世界に送るよ。そこの円の中心に立ってくれる？」

「いろいろ世話になったな。」

「いや僕がイレギュラーをちゃんと処理出来なかったのが、原因だから気にしないで。」

さあいよいよか

俺の第2の人生

存分に楽しんでやるぜ

「じゃあ行くよ。並行世界に転生！！」

ガコッ

「なんで落とし穴あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「あっ、世話係派遣するの忘れてた…。」

prologue2（後書き）

なんかぷろろーぐからグダグダな匂いが…

気をつけます！！

あと願い事３つなのに４つじゃんっていうのは作者がまとめてひとつとして見たからです。

あしからず。

やっと本編…

がんばるぞ！！

1話　（前書き）

やっと本編に入ったよ…。

とはいえどうなる事やら…。

ノリと気合いでどうにかしよう！！

頑張るぞオー！！

1話

「お～い葵。今日の修行始めるぞ。」

「はい。お父さん、よろしくお願いします。」

「ああ、よろしく。」

転生から5年。

偶然か必然か前世と同じ名前になった。

そして俺はお父さん、望月薫(もちづきかおる)さんのもとに3人姉弟の末っ子として生まれた。

お父さんは日頃はレストランの経営者として働いているけど、武道(バトルマニア)家でもあり、合気道や抜刀術など今では古武術と言われているような武術を習得している。

その他には槍、棍、なぎなた等の長物。

弓や銃などの長距離武器の扱い方も教わった。

やはりチートの身体能力は凄まじく、普通なら習得に何年もかかるものを数日で習得出来てしまう。

今は空手などの近代実践型の武術を教えてもらっている。

「よし、今日はここまで！！」

「ありがとうございました！！…ぷは～疲れたぁ～。」

「うん、相変わらず反則的に飲み込みが早いな。もうお父さんが教えられることはもう無いな…。あとはお父さんと組み手をして実戦感覚を養おう。早速明日から行うよ。」

「はい。よろしくお願いします！！」

「お疲れ～。はい、2人ともタオルとスポーツドリンク。」

「ああ、すまんな奈緒子。」

「ありがとう。奈緒子お姉ちゃん。」

「どういたしまして。相変わらず2人とも動きが化け物じみてるね。途中から動きが見えなかったよ。」

今タオルとスポーツドリンクをくれたのは望月奈緒子（もちづきなおこ）さん。

上のお姉さんで中学3年生の優しいしっかり者のお姉さん。

とはいえ、前世の記憶がある俺には年上だけど年下みたいな変な感じがある。

いわゆる、「身体は子供、頭脳は大人」状態だ…。

多分今ならコ〇ン君と苦労を分かち合える気がする…。

「もう朝ご飯だって。ママが呼んでるよ。」

「もうそんな時間か…。お母さんや美月を待たせても悪いし、急いで行くか。」

「うん！！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「おはようお母さん。」

「はい、おはよう。葵君これ持っててくれる？」

「うん。」

この人がお母さん、望月桜子（もちづきさくらこ）さん。

お父さんのレストランで料理長をしている料理上手な優しいお母さん。

「ふわぁぁ、パパ、あおちゃんおはよう。」

「美月お姉ちゃんおはよう。随分と眠そうだね。」

「ああ、おはよう美月。また夜更かしでもしたのか？」

「うん…。ちょっと小説読んでたら遅くなっちゃって…。」

このちょっと…いやかなり眠そうな人が下のお姉さん、望月美月（もちづきみずき）さん。

奈緒子お姉ちゃんと同じく優しい…というかすごく俺を甘やかそうとするちょっとおっちょこちょいな中学1年生のお姉ちゃん。

いわゆるブラコンですね。わかります。

しかも抱きつき癖があるのでなかなかに困りものである。

加えて望月家の女性陣はかなりの美人さん揃いだ。

お母さんなんかは正直お姉ちゃん達と姉妹言っても全く違和感はない。

お父さんもかなりのイケメンさん。

とても30代後半とは思えない。

そんな中俺は突然変異とも言うべきほどに似ていない。

おそらく前世の影響もあるのだろうが、とてもお父さん達の子供とは思えない。

ただやはり血の繋がりがあるのか、前世よりはカッコよくなっていた。

おそらく中の上くらいだろう。

「それじゃあ食べようか。お母さんも座って。」

「ええ、それじゃあ手を合わせて…。」

「「「「「いただきます。」」」」」

「ねえ、あおちゃんは今日もパパと修行してたの？」

「うん、やっとお父さんから組み手しようって言ってもらえたよ。」

「へぇ～すごいね！！私なんか合気道だけなのに、まだそんなとこまで行ってないよぉ。さっすが私の弟だ！！」

「そりゃ美月と違って葵は早起きしてちゃんと修行してるからね。その辺は私に似てるよね。さすが私の弟よね。」

「なによぉ、なおねぇ。あおちゃんは私の弟よ！！」

「私の弟に決まってるじゃない！！」

「私のよ！！」

「私！！」

「お姉ちゃん達…あのさ」

「「葵（あおちゃん）は黙ってて！！」

その言い合いは意味無い事気づいてないのかな？

何しろ2人とも俺の姉なんだし…。

「ほらほら2人落ち着いて。その辺にしときなさい。葵も困ってるし、学校にも遅れるぞ。」

「「はっ、はぁ～い。」」

「葵もごめんね？」

「あおちゃんごめんね？」

「気にしてないよ奈緒子お姉ちゃん美月お姉ちゃん。ほら早く食べないとほんとに遅刻しちゃうよ？」

「わっ、ほんとだ。ごちそうさま！！行ってきます！！ほら美月行くわよ。」

「待ってよなおねぇ。ごちそうさま&いってきま～す。」

慌ただしいなぁあの2人は…。

まあ元気があるのはいいことだけど…。

「そろそろ私たちも行こうか。それじゃあ葵、悪いが後片付け頼んでもいいかい？」

「うん、分かった。」

「ごめんね葵君。ほんとはお母さんがしなくちゃいけないんだけど…。」

「ううん、これくらいはお手伝いしないとね。いっつもおいしいご飯を作ってもらってるんだから、何にもしないと罰が当たっちゃうよ。」

さすがに何にもしないのは罪悪感があるし、このままじゃニートになりそうだ…。

「葵君はいい子ね。それじゃあ悪いけどお願いね。じゃあ行ってくるわね。」

「葵、いい子で待っているんだよ。」

「うん。お父さん達も気をつけて行ってきてね。」

「ああ、行ってきます。」

さて、お父さん達を見送ったし、片付けもさっさと終わらせちゃお。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「頭の中思いでいっぱ〜い〜溢れそうなのちょっと心配〜。」

やっぱいいな。

けい〇ん。

神曲多いしなぁ。

さて洗い物も終わったし

つぎは…

あれ…

目の前が…

だんだん白く…

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「あれここは確か…。」

「やあ久しぶりだね。葵君。」

「あんたは死神！？」

「元気そうだね。今の生活はどうだい？」

「ああ、いいところに転生させてもらったからな。みんなとても優しいし、とても満足しているよ。んで何の用だ？ここに呼び出したからには、それなりの用事なんだろ？」

「うん、君のパートナーを紹介しとこうと思ってね。」

「パートナー？デバイスのことか？デバイスなら自作するって言っただろ？」

「デバイスじゃないよ。戦闘におけるパートナー。だって君、魔法戦闘の知識はあってもスキルがないだろ？」

「まあ確かに…。」

「そのための戦技教導官も兼ねてるんだよ。」

「なるほど…。で？それは誰がしてくれるの？あんたか？」

「僕じゃないよ。彼女がしてくれる。」

彼女って誰もいな…。

「私です。」

「うおっ。いつの間に…。」

「驚かせてしまって申し訳ありません。ワルキューレと申します。」

ワルキューレか…。

確かラグナロクに備え、主神オーディンの命令で数々の戦場で戦死した戦士を英霊としてヴァルハラに導く戦女神だったはず…。

それゆえに死神と同列に扱われることもある…か。

だから死神の所にいるのかな。

「望月葵です。これからよろしくな。」

「はい、我が主よ《イエス・マイロード》。」

「はっ？どういうこと？」

「ある意味使い魔みたいなものだからね。まあそんな堅苦しく考えなくていいよ。」

「いけません。こういうのははっきりしておかねば…。」

「そういうことか。まあ共闘することになるんだし、これからはお師匠さんになるんだし、そういう固いのはなしにしようぜ。むしろ

俺がお願いしないといけない感じだしな。」

「いえっ、そんなっ…。」

「ははっ、まあ仲良くやってください。あっ、あと彼女は他の人には見えないようになれるから。」

サーヴァ〇トの英霊化みたいなもんか

「わかった。じゃあ帰ってもいいか？」

「うん。もういいよ。送ろう。その円に立ってくれるかな？」

「？ああ、分かった？」

あれ…。この展開…前にも…？

「並行世界転送！！」

ガコッ

「またこの落ちかあああああぁぁぁぁぁぁぁ。」

1話　（後書き）

長い…。

長かった…。

とりあえず前回のパートナーフラグを回収。

どうしようかな。

それではまた次回

「ワルキューレちゃんの地獄が天国に見えるかもね♪特訓編（仮）」

でお会いしましょう。

2話（前書き）

ＰＶ２０００越え

ユニーク６００越え

ほんとにありがとうございます。

感謝感謝としかいいようがないっす！！

まだまだ稚拙な所も多々ありますが、生温かく見守ってやってください。

2話

ワルキューレが俺のパートナーになって4年の月日が流れた。

まああれですね…。

最初の1年は死ぬかと思いましたよ…。

まずは…

「主には死神から人としては有り得ないほどの魔力を貰いました。当然リンカー・コアもありますから、この世界の魔法も使えますし、魔術回路等の他の並行世界の魔法特性もありますから、この世界以外の魔法を使うこともできます。加えて主のお父様から近接戦闘等の戦闘技術も教わったのでしょう。技術については文句はありません。ただ…。」

それなら文句はないだろと思っている人もいるだろう…。

俺でもそう思っていた…。

「ただ、主は身体が出来ていません。どんなに身体能力が高く、魔力が高かろうとも、身体が着いていていきません。特に大出力魔法にはひどい負担がかかります。まずはそれに耐えうる身体を造る。最低でもこの1年は身体造りに専念し、魔法に関する一切を禁止します。」

「身体造りって何をするんだ？」

「とりあえず基礎体力作りですね。まあ今日は初日ですから軽くフルマラソンを行いましょう。」

「は？」

「あっ、ちなみに3時間を切れなかったら…」

「切れなかったら…？」

「間髪いれずにもう1セット行きますからね。」

笑顔で言いやがったこの鬼！！

「鬼じゃないですよ。戦女神です。」

「心を読むな！！」

とにかく1年目は身体をいじめ、鍛えた。

最初は血反吐吐きそうだった。

というかマジで吐いた。

修行の一環としてワルキューレとも組み手をした。

おかげで骨が折れなかった所はなかった。
下手をしたら内臓が潰れたこともあった。
そのたびにワルキューレに治癒魔法をかけてもらい、すぐにまた組み手ということもあった。
他にも崖から突き落とされたり、熊の出る山に放置されたり…。
ああもう、思い出すだけで寒気がする…。
2年目に入り、だんだん簡単な魔法から魔法禁止令が解除されていった。

「まだ魔力の練りが甘いですよ。そんなんじゃいつまでたっても私には敵いませんよ？」
「くそ～！！これでどうだ！！」
「じゃあまた同時にぶつけますよ？」
「「炎よ、ファイヤーボール！！」」
キュン
ドゴーン

「うがぁ、勝てねぇぇぇ！！」

「また私の勝ちですね。１２５戦１２５勝。」

「つぎこいや～！！」

「主の持つ魔力量も質もはっきり言って、私より上です。それでも私の魔法に負けているのは何故だと思いますか？」

なんでだろう…。

ワルキューレの言うとおりならば俺に負ける理由はない。

何か別にあるんだ…。

何だろう…。

「主、１つヒントをあげましょう。主はその魔法は何処で覚えましたか？」

「はっ？前世のゲームだけど…。」

「そこにヒントがありますよ。そこの固定観念が無くなれば勝てますよ。」

どういうことだ…？

ファイヤーボールはテイ〇ズシリーズに出てくる初期魔法だ。
魔力もそんなに使わない…。
あれ…？
魔法発動の最低値はあるけど、上限はなかったよな…。
もしかして俺って最低値でしか撃ってなかった？
出来る限り魔力込めてみるか…。

「すぅ、はあぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「おや？気付いたようですね。そういうことです。確かに無駄を省くために最低値の魔力で質を高くが基本ですが、時には必要以上の魔力を込めて質を少し下げることも必要です。」

「やはりそういうことか…。」

「気付いたなら、倒れるまでやりますよ！！」

「おう、いくぞ！！」

てな感じでぶっ倒れるまで魔法を打ちまくる。
それによって魔力運用の効率化、伝達速度等、実戦に必要な基礎ス

キルを徹底的に身に付けた。

まあ後はおかしい修行と言えば、早口勝負かな…。

詠唱魔法を使うときに噛んだら、洒落にならんだろ…ということらしい。

3年目に入ると能力を中心に確認していった。

簡単にいえば、「王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）」とか「無限の剣製（アンリミテッド・ブレードワークス）」その他、斬魄刀の解放やら錬金術等々漫画やゲーム、アニメ、小説等に登場する能力の確認と習得に1年を費やした。

そして4年目の今年はやっと大出力魔法を含めた戦闘訓練に突入した。

「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック
契約（トト・シュンボライオンディアコネートータ）に従い我（ネー・エレボス）に従え氷（ヒュポゲネア）の女王（ハイオーニオン）来（ハイオーニエ）れとこしえのやみ（クリュスタレ）えいえんのひょうが
全ての命ある者（パーサイス ゾーサイス）に等しき死（トン・イソン・タナトンホス）を其（アタラクシア）は安らぎ也
おわるせかい（コズミケー・カタストロフェー）」

ピシッ

パキーン

「うへ～ここまでの大出力魔法は詠唱噛みそうになるな。」

「そっちですか…。普通魔力の方で疲れません？」

「いやまあ死神から貰った魔力はあるし、キュレとやった魔法修行のおかげで魔力運用の効率化とかも出来てるしな…。」

「そういう問題でもないと思うんですけど…。」

「そういう問題だと思うけど…。」

「まあとりあえず今日はここまでにしましょう。お疲れ様でした。」

「じゃあ今日はもう帰ろうか。」

「はい。」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ただいま～。」

「おかえり～あおちゃん。今日も一人で修行？」

「うん。最近はお父さんも忙しそうだしね。」

「そっか～。そういえば最近修行で帰るの遅くなってるよね。お母さん達心配してたよ。今日は早かったけど、ちょっと気をつけてね。最近物騒だしね…。」

「分かった。気をつけるよ。心配掛けてごめんね美月お姉ちゃん。」

「うん。そういやあおちゃん学校の宿題は？修行もいいけど、そっちもちゃんとしないとなおねぇに怒られるよ。」

「大丈夫。いっつも修行の前に終わらせてるし…。」

というか学校で終わらせてるし…。

実はもう1回小学校に行くのが辛い…。

「そっか、まぁあおちゃん頭良いしね。」

「僕のことより、自分の事を考えなよ。」

「そうよ。あんた葵と違って頭悪いんだから。ちゃんと勉強しないと授業に着いていけなくなるわよ。」

「あっ、奈緒子お姉ちゃんただいま。」

「おかえり葵。」

「ちょっとなおねぇ！！それはひどくない？私だってちゃんと勉強してるよ～。」

「じゃあ次のテストでその成果を見せてもらおうじゃない？それより晩御飯だって。」

「わかった。ほら美月お姉ちゃん奈緒子お姉ちゃん早く行こう。僕

お腹減ったよ。」

「うん。いこっか葵。」

「うう～なんか釈然としない。」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

さて飯食ったし、風呂入ったし、さっさと寝よ。

「じゃあお父さん、お母さん、おやすみなさい。」

「はいおやすみ。」

「おやすみ～。早く寝るんだぞ。」

「は～い。」

「お姉ちゃん達もおやすみ。」

「うんおやすみ。」

「また明日～。」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ガサガサッ

「はぁ…はぁ…くっ…はぁ…はぁ…。」

グウォォォォォォ

「くっ…絶えたる響き、光となれ。許されざるものを封印の輪に！！ジュエルシード封印！！」

グウォォォォォォ

ドサッドサッ

ズルズル

「逃がし…ちゃった…。追い…かけ…なく…ちゃ…。」

ドサッ

「誰か…僕の声を聞いて…力を貸して…。」

「魔法の力を…」

キィーン

トサッ

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「この夢は…。」

「どうしたのですか？主？」

「いや、なんでもないよ。とうとう物語が始まるらしい。」

「そうですか。今までの修行の成果を使うときですね。」

「ああ、頑張るさ。協力してくれよ。」

「はい、我が主（イエス マイロード）。」

さあ忙しくなるぞ～。

2話（後書き）

やっと無印本編突入です。

正直なかなか構想が纏まらないんですが、なるべく考え付く限りの事をしようと思います。

とりま、アニメを見ながら頑張って書いていきますので応援よろしくお願いします。

3話（前書き）

本編よりも前書き書くのがツライお年頃♪

3話

「主…。1つ言いたい事があります…。」

「なに？キュレ？」

「主が忙しくなると言ってから1週間が経ちました…。」

「うん。そうだね。それで？」

「それから何にもしてないじゃないですか！！原作介入しないんですか！？」

「当然するよ。でもまだ時期じゃない。でもまあ様子見るくらいはしとくか…。」

「主！！では…。」

「出かけるよキュレ。」

というか原作知ってんだなキュレ…。

「当然知ってますよ。無印からＳｔｒｉｋｅｒｓまで全部見ました。」

「だから人の心を読むな！！」

「私のデフォですから！！」

嫌なデフォだな…。

「まあ主限定ですけど…。」

「俺だけ！？かなり無駄じゃないそれ！？」

「気にしたらだめですよ。」

「気になるわ！！」

「さあさあ行きますよ！！」

「待てコラ！！その辺りちゃんとはっきりさせようじゃないか…！！」

はぁ…疲れる…

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「それで主。今日は何をするんですか？」

「とりあえず翠屋に行ってみるか…。将来の魔王も見てみたいしな。」

「そうですね。私も気になります。」

「それじゃあ行k」

ピカッ

ドーン

メキッメキメキ

「んなっ！！まさか…！！」

「主。ジュエルシードが発動したようです。」

「確かこれって…街中に樹が生える話じゃなかったっけ？」

「そうですね。被害減少の為にとりあえず厄介な根は切り落としました。」

「ありがとう。こりゃ今日はなのはに会うのは諦めたほうがいいな。」

「そうですね…。まずはこの状況を何とかしましょう。」

「いや、いいだろ。なのはが対処してくれるだろうし、まだ俺という異分子（イレギュラー）を知られたくないしな。とりあえずは原作通りってことで…。」

「わかりました。」

ヒュー

ドーン

「ほらもう対応してる。というか、うお～バスター始めて見た。やばっ、ちょっとテンション上がる！！」

「そんなこと言ってないで帰りますよ。もう用はないんでしょ。」

「はいはい分かりましたよ。」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「もう少ししたら介入するからな。フェイトと接触した後ぐらいかな？」

「分かりました。」

さて怒られないうちに帰りますか…。

うん？あれって…女の子？

おいおい信号赤じゃねぇか！！

「主！！」

「ああ分かってる。そこの君危ないよ！！」

「えっ…？」

「ちっ。」

何でこんな時に限って車が来るんだよ！！

間に合えぇぇぇぇぇ！！

キキッー

「危ないだろ！！気をつけろ！！」

「すいませ～ん。」

ふう間に合った…。

女の子はクリッとした眼をしていて、鼻筋もきれいに通っている。

さらにブラウンの髪を白のリボンで2つに括っている。

普通にかわいいと思う。

ここで勘違いがあっては困るのでこれだけは言っておく。

俺は断じてロリコンではない！！

だいたいが俺は今９歳なのだから、むしろ俺がしょｔ…げふんげふん。

とりあえず見た所、同学年っぽい。

しかしこの髪型どっかで…。

「あっ、あの…。助けてくれてありがとうございました。」

「うっ、うん。大丈夫だった？怪我してない？」

「うん。大丈夫。」

「そっか。なら良かった。」

『主、主。』

『何？急に念話なんか使って…。』

『この子どこかで見たことないですか？』

『キュレもそう思う？俺もどっかで見たことあると思ってたんだけど…。何処だろ…？』

「あっ、あの！！私高町なのは。あなたの名前は？」

『『ああ～～～～～～～っ！！魔王だあぁぁぁぁぁぁ！！』』

あぶねっ。叫びそうになった。

『主。介入はしないんじゃないですか？』

『いや不可抗力だろ。俺ここの話知らないし…。まあ結果オーライだろ。当初の目的は果たしたわけだし…。』

『そうでしたね。今日は魔王とエンカウントするために街に出たんでしたね。』

『そういうこと。まあ今は魔力も抑えているし、俺が魔導師だとは気付かれんだろ。』

『そうですね。それなら大丈夫でしょう。』

「あの～あなたの名前は？」

「あっ、うん。僕は望月葵。」

「葵君かぁ～。あのぉ助けてもらったお礼がしたいから、お家に寄って行って欲しいんだけど…。いいかな？」

「えっ？いいよ。そんな大したことしたわけじゃないし…。」

「大したことだよ。いいから。お願い！！」

「はぁ…。分かった。お邪魔させてもらうよ。」

「うん！！良かった！！こっちだよ。」

はぁ疲れる…。

『でも良かったんですか？家行っちゃって？』

『しょうがねぇだろ…。あんな目で頼まれたら断れん。』

『甘いですねぇ。いやただ女好（ロリコン）きなだk…。』

『違う！！というか言い草が酷い！！』

「ここだよ。私のお家！！」

「えっ、あっもう着いたの？」

「うん。さあ入って。」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ただいま～。」

「おじゃましま～す。」

「お帰りなのは。」

「ただいまお姉ちゃん。」

「うん。あれ？そっちの子は？」

「こっちは望月葵君。さっきなのはが車に轢かれそうになった時に助けてくれたの。お礼がしたいからって連れてきたの。」

「えぇ！？なのは、大丈夫だったの？」

「うん。葵君のおかげで怪我１つしてないよ。」

「そっか。良かった。あっ、そうだ。葵君だっけ？私は高町美由希。なのはを助けてくれてありがとね。」

「いえ当然のことをしたまでなので…。」

「いやいや、ホントにありがとね。なのはは大切な家族だから…。あっそうだ。こんなところで立ち話もなんだから、上がって上がって。」

「お邪魔します。」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「いやぁホントにありがとうね葵君。」

「ほんとにありがとうございました。」

「いえいえ、ホントに当然のことをしたまでですから。頭上げてください。」

うわぁ～リアル士郎さんと桃子さんだ～。

この2人に頭下げられると、なんとも居心地が悪い…。

てか若い！！

大学生の父親と母親じゃないだろ！！

おかしいおかしい！！

「俺からもお礼を言うよ。ありがとう。」

「恭也さんも頭上げてください。」

ホントになんだかな…。

「そういえば葵君って美月ちゃんの弟なんだね。さっき家に電話掛けた時に美月ちゃんが出たからびっくりしたよ。そういえば自慢の弟がいるって聞いたことがあるなぁ。」

「えっ…美月お姉ちゃん、学校でそんなこと言ってるんですか？」

「うん。なんでもお姉ちゃんと弟は出来がいいから、負けないように頑張らないとって。」

「あっ…あはは…。」

いやまあ、そら実年齢２９歳が小学３年生の問題解けないとさすがにまずいだろ…。

「もう一人のお姉ちゃんは何年生なんだい？」

「大学１年生です。」

「俺と同い年か…。大学は何処だい？」

「聖祥大学です。」

「同じ大学だ…。あれ？望月ってどこかで…。あっ、もしかしてお姉さんの名前って奈緒子っていうんじゃないのかな？」

「はい。知ってるんですか？」

「ああ、忍…俺の彼女の親友だ。いつも名前で呼んでいたから気付かなかったよ。そういえば彼女も自慢の弟がいると言っていたな…。なんでも頭も良い上に、様々な格闘技を習得しているとても優秀な武道家だとか…。」

どこの完璧超人ですかそれ…。

俺まだまだキュレには敵いませんよ？

そりゃ魔法なしなら勝てるけど…。

「いやそんな…。お姉ちゃんが大袈裟に言ってるだけですよ。僕なんかまだまだです。」

「でも格闘技をやっているのは事実なんだろ？１つ手合わせしてくれないか？」

「えっ？無理無理！！敵いませんよ！！」

「そうだよお兄ちゃん。葵君もこう言ってるし…。」

「それはそうさ葵君。年季も違うし体つきだって違う。ただ単純に君の力を見てみたいんだ…。…奈緒子が言ってたことも気になるしね…。」

最後の言葉が聞き取れなかったけど、ここまで言われっぱなしだと男が廃る。

「わかりました。恭也さんよろしくお願いします。」

「えぇ！！危ないよ葵君」

「大丈夫だよ。えっと…なのはちゃん…でいいのかな？」

「それは別にいいけど…気をつけてね。」

「うん。じゃあ移動しようか。」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「勝負は1本勝負。急所打ちは反則。相手が負けを認めるか、第三者から見て明らかに負けと判断したところで試合終了。審判は私、高町士郎が行う。2人もいいね？」

「はい。」

「大丈夫です。」

「ははじめ！！」

ｓｉｄｅ　ｎａｎｏｈａ

みなさんこんばんは

私高町なのは

私立聖祥大付属小学校３年生

実は私魔法少女なんかやってるんですが…。

今日はちょっと失敗をしてしまって、落ち込んで帰っていたら車に轢かれそうになってしまいました。

もう駄目だと思った時に、男の子に助けてもらって。

お礼をするためにお家に招いたのですが、何故かお兄ちゃん達とは共通点がある様子…。

なんか悔しいなと思っていたら、いつの間にか葵君とお兄ちゃんが戦うことに…。

お兄ちゃんも何考えてるの～。

止めたけど、どうも無駄な様子…。

今私とお姉ちゃんは道場の隅で、試合の見学です。

「ねえ、お姉ちゃん。葵君大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。恭ちゃんもその辺分かってると思うし…。ほら始まるよ。」

「ははじめ！！」

「えっ…。」

勝負は一瞬で着いた。

葵君がお兄ちゃんの後ろから首元に木刀を当てている…。

一体何があったの？

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺は今恭也さんの頸動脈の所に木刀を当てている。

どうやったかだって？

縮地で後ろに回って木刀突きつけただけですが？
ちなみに能力は使ってないよ？
前にキュレに教わったら出来るようになっただけだよ？
というかなんか周りの人たちがポカーンとなってるんですけど…。
どしたの？
というか勝ち名乗りは？

「あの～勝負ありだと思うんですけど…。」
「えっ。あっ、ああこの勝負葵君の勝ち。」
「ありがとうございました。」
「ああ、ありがとう。しかし参ったよ。今のは一体どうやったんだ？」
「えっ？ただ回り込んで木刀突きつけただけですよ？」
「いや、だからそれをどうやったのか聞いたんだが…？」
「詳しくは企業秘密ですが、簡単にいえば縮地です。」
「縮地だと！！それが出来るのは達人の中の一握りだけだぞ！！はぁ…こりゃ奈緒子の言ってた通りだな…。」

「お姉ちゃんが何か言ってたんですか？」

「ああ、奈緒子は聖祥大に学年トップの成績で入学したため、周りから天才と持て囃されていたんだ。しかし当の本人はそのことを迷惑がって否定し続けていたから、ある時そんなに否定するのか聞いてみたんだ。すると彼女は…」

「私が天才なら、私の弟はさらに上の天才ってことになる…。弟は私なんかとは比べ物にならないほどの天才だから…。神様に愛されていると言ってもいいわ。だから私は自分を天才だとは思わない。上には上がいることを知っているから…。自分がさらに上に行けることを知っているから。だから正直天才って言ってほしくないのよ。そのことに胡坐をかいてしまいそうな自分がいるから…。」

「って。その時は信じてなかったけど、今日手合わせしてみて彼女の言ってたことが身に染みて分かったよ。」

「そんなこと言ってたんですか…。」

「まあ君の話はいろいろ聞いてたからね。一度手合わせしてみたいと思ってたんだ。まさか負けるとは思ってなかったけどね。」

「そうですか…。」

「さて話は終わったかな？」

「父さん…。ああ終わったよ。」

「そうか。なら飯にしよう。葵君も食べて行きなさい。」

「えっ、悪いですよ。」

「いいんだよ。なのはも助けてもらったし、恭也とは手合わせして貰ったしね。お家には連絡しておくから遠慮しないで。なのはもそっちの方が嬉しいだろうし…。なあ、なのは？」

「うん。葵君、一緒にご飯食べよ？」

「そうですか。じゃあお言葉に甘えて…。」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「とてもおいしかったです。ありがとうございました。」

「いやいやこちらこそありがとうね。良かったらまた遊びにおいで。なのはも喜ぶだろうしね。あとこれ持って帰って皆で食べてくれ。ウチのケーキだよ。」

「何から何まですいません。また遊びに寄らせてもらいます。」

「ああまたね。」

「じゃあ俺は葵君を送っていくよ。」

「いや大丈夫です。近くまで親が迎えに来てもらうように電話しま

したから。」

「そうなのかい？」

「はい。大丈夫です。今日はありがとうございました。おやすみなさい。」

「葵君またね～。」

「うん、なのはちゃんもまたね～。」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ただいま～。」

「おかえり～。あおちゃん美由希ちゃん家に行ってたんだね。急に電話かかってきたからびっくりしたよ。」

「うん。そういえばコレ、お土産でもらったよ。翠屋のケーキ。皆で食べてって。」

「やった～。翠屋のケーキ美味しいんだよね。」

「僕の分置いといてね。今日は疲れちゃったからもう寝るよ。」

「分かった。おやすみ、あおちゃん。」

「うん。おやすみ美月お姉ちゃん。」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

はあ、まさかこんな所で魔王とエンカウントするとは思わなかったよ。

さてさて次は顔を隠して会わないとな。

次は魔法戦で会うだろうからな…。

仮面でも作っとくか…。

「主…私の事忘れてませんか？」

あっ…忘れてた…。

「主…酷いです…。」

「ごめん。だって、キュレ喋らなかったし…。」

「もう知りません！！明日は覚悟しておいて下さい！！明日の地獄はいつもの倍ですから…。」

「それだけは勘弁～～～～！！」

結局次の日まで機嫌は直らず、葵はボコボコにされたのはまた別のお話。

「はぁ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜。」

3話（後書き）

始めて魔王とエンカウントしましたがいかがだったでしょうか？

他の二次小説とは違い士郎さんと恭也さんは普通の良いお父さん、お兄ちゃんにしてみました。

次はやっと魔法戦に入れると思います。

お楽しみに…。

もしよろしければ感想もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7236o/

魔法少女リリカルなのは～転生せし者～

2010年11月8日13時48分発行